

唐詩選について

高 木 嘉 吉

(会長・佐伯市藤原)

機関誌百三十一号に「人生意気に感ず」の原典を求めて、魏徴の述懐を紹介した。これは開卷劈頭^{へきとう}を飾る名文であるが、興の趣くままに読み続けて唐詩選を読了した。読了したと言っても、白文であれば漢学の素養のない私に歯の立つ代物ではないが、服部南郭^{なんかく}の講釈に頼って大體の理解を得たわけである。

以下唐詩選について感ずる所を述べるが、会員の皆さんが之を契機として、唐詩の世界に遊び、長安の榮華を偲ぶため、唐詩選を手につらるるようになればと願って筆を進める。

唐詩選の撰者は済南の人李攀竜^{はんりゆう}である。字の于鱗^{りりん}、号の滄溟^{そうめい}がよく使われている。明代の詩人で、正徳九年(一五一四)に生まれ、隆慶十四年(一五七〇)五十七才で没している。唐詩を選したものは多いが、滄溟の選が最も正こうとされて定着している。

詩を読んで感ずることの一つは、故事來歴が多分に読み込まれていることである。素養のない筆者には、解釈書に頼る外に手のつけようがない。も一つの難点は地名である。唐三百年の首都は長安で、長安の繁華は史上最大のものであった。唐の官吏にとって、長安を去って地方に赴くことは左遷で、詩の中に左遷を嘆くもの、左遷の友を慰めるものが多い。ところでその行く先の地名であるが、黄河・楊子江両大河の流域、広漠無限な大陸、時間的にも千余年を隔て、一々把握することは不可能である。

唐詩選に登場する詩人及詩数は左表の通りである。
(作家名の下の数字は掲載された詩の数である。)

魏 徵 一	柳 宗 元 五	蔣 業 一	孫 逖 三	釋 處 默 一
張 九 齡 六	崔 署 二	張 若 虛 一	玄 宗 一	蘇 味 道 一

